

## 私たちの活動と「わいわい文庫」

全国音訳ボランティアネットワーク

代表 藤田 晶子

### 耳で聴いて理解できる読みを 目指す「音訳」

私たちの会の名前には、「音訳」ということばが入っています。

音訳が誕生して60年が経過しましたが、朗読ほどは社会に知られていません。音訳とは、視覚障害者（利用者）が、耳によって読書や学習などをするための音声DAISY（録音図書）を製作することです。文字だけではなく図表や写真など、書面にあるものはすべて読みます。耳で聴いて理解できる読みを目指し、声に出して読むことのむずかしさを感じながら、日々精進しています。

それまで全国の音訳ボランティアは、同じような悩みを抱えながら、横のつながりもなく、ひたすら視覚障害者の目の代わりと言う自負をもって活動していました。そういう仲間をつなぎ、情報を共有し、より質の高い音訳を目指して、2007年に全国ネットワークを立ち上げました。

そしてその後、量的に充分とは言えない音声DAISYを少しでも増やしたい、

利用者のニーズにすばやく対応したいという思いから、図書館などと連携し、協働するために5つのプロジェクトが生まれました。その中の一つが、「伊藤忠記念財団マルチメディアDAISYプロジェクト」と銘打った「わいわい文庫」になります。

### これまで手がけてきた音訳との 違い

出会いは10年ほど前に遡ります。当時、板橋区内にあった財団事務局である「東京小中学生センター」に音訳ボランティアが集まりました。財団の新規事業についての説明会でした。私たちにマルチメディアDAISYを作りなさいと言われても、ハードルが高過ぎますが、音訳だけということでしたので、何とかかなるかなと思いました。

しかし、目に障害があるだけではなく、学習障害や肢体不自由など幅広い子どもたちに向けて、マルチメディアDAISYを製作し提供するという話を伺い、不安を感じたことも事実です。

これまでの私たちの利用者は、不特

定多数の視覚障害者で、そのほとんどは中高年の方々です。また音訳では、音訳者の感情はなるべく入れず、アナウンサーがニュースを読むような感じで平板にと教わり、実践してきました。

さらに不安だったのは、失礼ながら財団の皆様が、障害のある子どもたちとあまり縁がなかったということです。

その後、伊藤忠記念財団の矢部剛さんに、私たちが主催する「マンガも読んでみよう」というシンポジウムに参加していただき、再び熱心にマルチメディアDAISY製作への協力要請をいただきました。

子どもたちにどんな読みをしたらいのか戸惑いながらも、私たちの音訳スキルがお役にたつならと腹を決めました。私たちとしても、初の試みです。音訳者選びに、あえて公募という形はとらず、この人なら、このグループならというみなさんを、会員の中から一本釣りしました。期待に応えようとベストな布陣で臨んだつもりです。

事業が始まってある時、読みにもう少し表情をつけてほしいといわれました。これがなかなかむずかしいのです。子どもたちの喜ぶ顔が見たいと思いながら、本来の音訳というものから飛び出せないのです。矢部さんの「それは当然ですよ。みなさんが、長年培ってきたものですから。少しだけ変えてみませんか」ということばに、ほっと

しました。それからは、「子ども向けの特別なもの」を合言葉にしています。

## 読書バリアフリー研究会や『わいわい文庫活用術』を通して、読者の声を受け取る

ところで私たちの最大の関心事は、子どもたちがどんなふうに聴いてくれているのか、果たして読みは、これでいいのかということです。直接読者に聞くこともむずかしい面があります。その点に関して、財団のみなさんは、きちんとフォローしてくださいました。

ひとつは、各地で開催される「読書バリアフリー研究会」であり、もうひとつは、年1回発行される『わいわい文庫活用術』です。

たとえば、学習障害当事者のお話も伺いました。また、1人の熱心な先生の取り組みが、校内全体に広がった事例、子どもたちの様子が手に取るように伝わってきます。先生方の日々の努力は、いかばかりかと毎回、感動を覚えます。

あるバリアフリー研究会で発表された鹿児島先生からは「聾」の子どもたちと、わいわい文庫の一作品を取り上げ、練習を重ね、劇として発表したという事例でした。子どもたちが声を出して演じているのです。こんな活用例もあるのかと、目から鱗でした。

「伊藤忠記念財団はもちろん、ボラン

ティアさんのおかげで、作品ができあがっている」とお礼をいわれました。ありがたいことです。

この電子図書を製作しているところは、他にもありますが、ほとんど教科書作りに特化されています\*注。まずは教科書からというのは、当然でしょう。しかし、車の両輪のごとく、子ども向けの読み物も、もっと製作されるべきです。子どもたちは、教科書だけで育つものではありません。

その子どもたちに、今まで600タイトルもの作品を届けてきた伊藤忠記念財団のご苦勞に、心からの敬意を表し

ます。そしてこれからも、子どもたちの笑顔のために、お手伝いさせていただきたいと思います。

もっともっと、たくさんの作品が生まれることを祈りながら。

©全国音訳ボランティアネットワーク  
<https://www.onyaku.net/>

\*注：公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会では、2019年から教科書以外の子ども向けのマルチメディアDAISYの製作を開始しました。

